さいわい通信

第５号
2024年2月22日
(株)さいわい企画
編集 クリスチャン・セレモニー・クラブ
(C・C・C)事務局
052－893-7323

今号ではお二人の方に、キリスト教葬儀を終えてのお気持ちをお手紙で、またご本人の文章にて証しして頂きました。どちらも主が共にいて下さる葬儀として心が温かくなるような家族の愛と神様の愛がたくさんあふれていました。

故川田由紀子様

日進ベタニヤチャペル

故人の証し、福音の証し

私は80年前に、現在のロシア、サハリンの樺太の豊原に生まれました。そのうちに父が結核にかかりました。そこで当時京都府の宮津に住んでいた祖父母の家に、父母と二才下の弟と四人でころがり込みました。祖父母の家は武士の家系で、祖父は教師をして居り、とても厳格でした。父の病いが重くなり、命も終わりに近づき母は二人の子供を祖父母に託し、離婚し別れて故郷に帰ったそうです。そのうちに父は亡くなり、私は祖父母に育てられ、弟は叔母にひきとられて参りました。私は三才頃、弟は一才の時でした。

それから私の苦しい人生が始まったのでした。まだまだ親の膝の恋しい時でしたが、淋しい時間が続きました。能力の足りない体の弱い子供でしたので、いつも「お前は馬鹿だ馬鹿だ」と言われ続け、この家には合わないと、とても困り者でいつも追いかけられ、叱られて逃げ続けていました。だんだん青春時に入り、心は増々孤独で涙する日々でした。しかしその中にも、私をじっと見て居られ導いて下さる方が居られたのでした。

祖父母は、熱心なクリスチャンであり、そして父は11人兄弟の長男で、本当に親不孝をかけたのでした。私の幼い頃は叔父叔母達に教会の日曜学校に連れて行ってもらいました。そのうちに、祖父母は教会の長老までして忠実に主に仕えていたそうですが、ある問題で家族みんなが教会に行けなくなりました。成長して私の淋しさを見て祖父母は私に教会に行っても良いと許されて行くようになりました。その頃は、只、教会が逃れ場でした。・・・

一人の男性と交際をするようになりましたが、ふられてしまい悔しさに自暴自棄となりあれた生活となりました。その中でも私は神様を求める心を失いませんでした。色々なところに行きましたがどこでも教会を見つけて行きましたが神様の事はまだ解らず呼び求めていました。

また、大阪から神戸へと移りました。一九五〇年ころの事です。今はもう帰る家もなく、家なし子が放浪しているようでした。生き甲斐もなく、何もない私は、いつも死ぬことを考えていました。病院で働いている時に、薬を盗んで死のうとしましたが、守られました。大阪で「日本イエス」の向後先生により洗礼を受けましたが、まだ信仰は全く解っていませんでした。そして別れた男性との思いを断つためにも、神戸の日本イエス灘教会にかわり、そこの保育園のお手伝いをするようになりました。（何とその教会に主の備えていて下さった主人に出会わせてくださいました。）ようやくそこで温かい家庭と愛を頂き感謝して泣いた事でした。

それから少しずつ本当の信仰生活に入っていきました。永い間、愛、愛とそればかり求め続けた私の心は閉ざされていて聞く耳を持っていませんでした。そして十字架の救いは本当に私の為だったのだと心から信じました。でも信仰の薄い私にはまだまだ自分の足りなさを人の何倍も努力しなければと思っていました。そのうち二人の娘も与えられ恵みによって救われましたが、この私は神様の愛を知るのはなかなかでした。神様は私を一つ一つ聖めて下さいました。自分では何も出来ませんでした。

千葉に一九六二年に主人の転勤で移ってから47年間、栄光教会でずっとお世話になって居りますが、自分の信仰の未熟さ故、５年半他教会にお世話になり、栄光教会には帰ることは無いと思っていましたが、多くの方々に祈られ、神様は、もう一度帰るようにと言われ、いまここに立っております。その教会で牧師先生は、私に本当に大切なことを愛をもって教えて下さいました。神様はその時一冊の本を与えられ、今迄、人生に傷ついたあらゆる心の傷、許せない人々への罪の悔い改めを、神様の愛の手によって祈りの中で解放が与えられました。生まれる前から私を選んで備え導いて下さった神様の忍耐と愛はどんなだったでしょう。

自分の努力では疲れ果てた私を抱き、「私の愛の中にいなさい。」と言われます。残りの生涯は大切に主に従い続けて参ります。栄光を主にお帰し致します。

詩篇40篇1～3節
「私は切なる思いで主を待ち望んだ。
主は、私のほうに身を傾け
私の足を巌の上に置き、
私の歩みを確かにされた。
主は私の口に新しい歌、
われらの神への賛美を授けられた。」

※こちらの文章は召天後にご家族が見つけられた文章でした。式の中でもお嬢様が朗読し紹介され、素敵な分ち合いの時となりました。感謝です。

み言葉を味わう④

ホセア13:14

わたしはよみの力から彼らを贖い出し、死から彼らを贖う。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。よみよ、おまえの針はどこにあるのか。あわれみはわたしの目から隠されている。

度重なる偶像礼拝のゆえにイスラエルの滅亡は免れないものとなった。しかし、ホセアはイスラエルの滅亡の預言を語っている真っ最中に、イスラエルの贖いを宣言している。イスラエルは滅亡すると言いながら、滅亡しないと言うのだ。

神はアッシリアを用いて、イスラエルに死をもたらす。しかし、死であっても神の計画に最終的な勝利をもたらすことはないのだ。イスラエルの王が国家を導くことができなくとも、真の王である神がイスラエルの歴史を導かれる。イスラエルを通して、世界を祝福する神の計画は揺るがされることはない。主がアブラハムに約束した通りに、イスラエルの子孫からキリストが生まれ、今日、私たちのところにまで救いが及んでいる。

神の主権は死に勝る。このキリストにあって、死はとげを失った。死は私たちを肉体から切り離すことはできても、いのちの源である神から切り離すことはできないのだ。死は今や神と会うための扉となったのだ。私たちがこの扉を前にした時、心残りのものもあるだろう。しかし、神の主権は死に勝る。主が責任をもって遺されたものを導いてくださるのだ。主が王であるゆえに、死のとげはもはやないのだ。

一麦ゴスペルチャーチ　牧師
山下義道

裏面にも記事があります

Y・I・様

活けるキリスト一麦教会

スウェーデンの宣教師エバ・オフロン先生とビルギット・オフロン先生は第二次世界大戦後、日本に来られました。富士急行線（今は富士山麓鉄道）の富士吉田駅（今は富士山駅）から歩いてすぐのところに教会を建て、伝道を始めました。

三ツ峠駅から三ツ峠のふもとに歩いて行ったところにお義母さんの平屋の家があり、ビルギット先生はよく家を訪ねてくれました。聖歌三四七番「いかにおそるべき」を先生はアコーディオンやギターを弾きながら天に響くような高らかな美しい声で賛美されます。この歌と聞くと心が平安になりました。お義母さんの家で家庭集会や子供のクリスマス会をやったりしました。主人は宣教師の手伝いをしていました。路傍伝道やテント集会、山の中、たんぼのあぜ道で紙芝居をして子供会をやりました。

聖歌三四七番　いかにおそるべきことありても…　は私たち家族のルーツの賛美であり私たち家族を一つに結んでいる曲です。告別式ではパイプオルガンの荘厳な響きの中でこの賛美を再び聞くことができて、私たち家族“初めの愛”に戻ることができました。

納骨に行く直前の日曜日、主人は仕事でしたが、私は義母と二人「お母さん、最後の礼拝だね」と言ってオンラインで一麦教会　古田先生のメッセージを聞き、パイプオルガンによる賛美も一緒に聞きました。私は白い布に包まれた義母の遺骨を抱いて何度も「ありがとうございました。」とお礼を言うことができました。神様が最後にともに過ごす時を与えてくれたことを感謝しました。

四月二十四日、義母はいつもの様に自分で歩いてデイサービスのバスに乗りました。次男のTさんに「行ってくるよ」と元気に声をかけて…。デイサービスでお風呂に入れてもらい、浴衣を着ました。お昼には月一回のお寿司を小さく食べました。お刺身は義母の大好物です。しばらくしてお茶を飲んでから、肩の力がスーッと抜けてそのまま眠るように天に召されていったそうです。病院にかけつけると、義母はベッドに静かに眠っていました。私は何も考えることができず、茫然としていました。主人と弟、私三人で義母を見つめて何が起こったかもわからずなす術もなく座っていました。

さいわい企画さんがかけつけてくださり、駐車場で病院の医師と看護師さんが深々とお辞儀をして、送ってくださいました。私は社長さんの車に乗せていただき一麦教会へと向かいました。私は社長さんとは知らず、牧師さんと話しているような安心感を覚えました。車内で私達家族が救われた証などを話しました。話をしていると、一麦教会に着きました。二階の白い布団の上にお義母さんを寝かせてくれました。一麦の姉妹方が来て、思い出話が尽きませんでした。

古田先生が来て話された時、私はホーッと肩の力が抜けて“大丈夫”と心の底から深い安心感に包まれました。藤田さんが明るくてきぱきと前夜式、告別式、八事斎場、と話をわかりやすく丁寧に進めてくれました。一つ一つの言葉にも家族へのいたわり、優しさが伝わってきて、心が落ち着きました。

義母は藤色が好きで、藤田さんが「お花は淡い藤色を多めにしてその中に紫の花も入れました。」と言って下さり、細やかな配慮をうれしく思いました。前夜式のとき、白やピンク、藤色、ところどころに紫色、淡く優しいいっぱいの花々の美しさに心うばわれました。

義母は花が大好きで、長い間花のスケッチや、ちぎり絵を続けてきました。

告別式では、義母をゆりや胡蝶蘭、美しい花々で飾ってくれました。教会の玄関で教会の方々が「やがて天にて…まもなくかなたの…」と賛美して八事へと送ってくれました。

私は義母を愛していました。義母も私を愛してくれていたんだなとしみじみ思いました。義母は命をもって私達家族を救ってくれました。私達家族が再び天で会えるように道を開いてくれました。私と義母の友人である姉妹二人が一麦教会へ加わりました。義母の一粒の麦が実ったと喜んでいます。

さいわい企画の社長様、藤田様、真実なキリストの愛の心をもってお義母さんを天に送って下さりありがとうございました。私達家族の心に平安を与えてくださりありがとうございました。

みんなの絵本

『かみさまのゆめ　GOD. S DREAM』
デズモント・ツツ大主教　ダグラス・カールトン・アブラムス　文
ファム・レ＝ウェイン　絵
ドン・ボスコ社　発行

この絵本の著者の一人は南アフリカ聖公会大主教であり、アパルトヘイトの撤廃に尽力し、一九八四年ノーベル平和賞を受賞しています。

Dear child of God, から始まるこの話は、子ども向けの絵本であると同時に、神様の子ども＝大人も含めた私たちに宛てたメッセージでもあるのでしょう。

著者は子どもたちに神様のゆめはなにか知ってるかい？と問いかけます。そして喜びを分かち合うことや思いやること。時に傷つけあってしまっても許すこと。まさにイエスのメッセージを子どもたちにも分かるやさしい言葉で伝えています。ここで神様の喜ばれることと、人とのより良い関係づくりに必要なことは共通していることに気付かされます。まぁ、文字にすれば簡単なことも実行しようと思うと難しことも往々にしてありますが…。さらに後半では見た目や文化の違いがあっても私たちはみな神様の子どもでひとつの家族であることを教えています。他者との違いを知り、認められたら、自分の身の回りも世界もきっと平和に向かいますよね。神様のゆめを叶えるために私たちにできることは何か。神様の愛と平和のメッセージを子どもたちにはやさしく教え、大人たちにはより深く考えさせる、そんな一冊ではないでしょうか。（藤田）

編集後記

※一麦教会のＩ様からは、素敵なお証と心のこもったお礼状を頂き、私の方こそ感謝でした。本誌では一部抜粋、再編集させていただきました。（藤）

※葬儀を通して本当にたくさんの証しがされ、共有出来ることは素敵ですね。これからも投稿、寄稿お待ちしております。（杉）

※もうすぐイースターですね。皆さまの教会ではどんなことをされますか？主の復活を覚えて感謝の心で日々を過ごしていきたいと思います。（山）